

## 「庚辰の年」について

吉 永 登

万葉集に引かれてる「柿本人麿歌集」については、近来種々な角度から論じられるようになって来た。その一つに土居光知氏の説がある。

氏は、まず七夕の歌をよむことは、人麿の死後、新帰朝の山上憶良によつて初められたものである。したがつて、青年時代の作品を中心によつて集められたといわれている「人麿歌集」に七夕の歌のあるのはどうしたことであろうかと疑い、さらに

そして人麿歌集中の七夕歌群の最後の歌は

天漢安の川原に定まりて神の競は時待たなくに（巻十、二〇三）

三) 定而神競者磨待無（この一首は庚辰の年之を作れり）である。左註にある「庚辰の年」は人麿の生きてゐた時代とすれば、六八〇年で斎藤茂吉の「柿本人麿」評新篇卷之下四三六頁によれば大武天皇白鳳九年人麿十八歳の作であり、年代がはつきり知れてゐる、人麿の最初の歌に先立つこと九年である。天漢安の川原の歌は、意味の解釈にも異説があるが、歌の大意は、天の川、安の川原で神々が会合するには、一年に一度といふやうな定まり

がなく、いつでもできるのに一七夕星の遇ふには時が定められてゐるのが恨めしい、といふのであつて、このやうに、七夕のこととを言はずして、それとわかるには、七夕歌が多く詠まれた後でなければならぬ。しかるに六八〇年以後、四十三年間七夕の歌はなく、七二三年憶良が詠じ始めたとすれば、この庚辰は天平十二年（七四〇）を考へざるを得ない。（万葉集大成7、二五六頁）と論じてゐる。従つて「人麿歌集」の最終的成立は、天平十二年以後であろうといふのである。

### 二

ところで、人麿に七夕の歌がなかつたということには問題があるとしても、「庚辰の年」を六八〇年とすれば、その頃に人麿が七夕の歌を作つたとすることは、たしかに無理なようである。そこに土居説の成立する可能性があるのであらうが、だからといって、土居説が正しいときめてかかるには不安がないでもない。というのは、土居氏は問題の左註を持つ歌が、果して七夕の歌であるかどうかについて吟味をしていないからである。

問題の歌を含む三十八首の七夕の歌の中、明らかに七夕の歌でな

いと思われるものが数首ある。すなわち

吾恋ひを夫は知れるを行く船の過ぎて来べしや事も告げなむ

（卷十、一九九八）  
あから引く色妙の子をしば見れば人妻ゆゑに吾恋ひぬべし

の二首については、沢瀉久孝氏は何れも七夕の歌でないと断定して

いるし、また

夕星も通ふ天路を何時までか仰ぎて待たむ月人男

（二〇一〇）

のごときも、諸家は何れも七夕の歌でないといっている。どうして誤ったかの説索は別にしても、三十八首中、たとえ数首にしても七夕の歌ならぬ歌が雜つているとすれば、問題の歌についても、当然七夕の歌であるか否かの吟味を行うべきであろう。

### 三

問題の歌には、「神」の字が用いられている。このあたり、本當はどうよんじよいか明らかでないのであるが、最近の諸注はカミと訓んでいて、土居氏も例外でない。しかるに万葉集中には、彦星・織女を神として扱つた例はないのである。

また、この歌には土居氏も「七夕のことを言はずしてそれとわかる」といっているように、直接七夕を思わせる表現は用いられていないようである。唯一の七夕に関わりのある「天漢」にしても、人磨が後年記録するにあたって、當時流行のきざしのあつた七夕関係のこの語を、我が國古來の神話に見えるアマノカハに当てたと考えることも出来ないことはない。このことは、

……天の安の川原に神集ひ集ひて……（古事記、その成立は古いものがあろう。）

天の川安の川原は走而神競者磨待無（人磨）

……天の川原に 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして……

（卷二、一六七、人磨）

とならべてみても明らかで、問題の歌はどこまでも、七夕とは関わりのない神話に関するものらしく、それが却つて神話に興味を持つていたと思われる人磨らしきを示すものといえそうである。

したがつて、万葉集編者が、七夕の歌と誤った経路も

アマノカハ（神話の）→天漢→七夕

のようと考えられるのである。

とにかく無批判にきめてかかるることは危険である。万葉にかぎらないが、そこに問題があるのである。——関西大学教授——